AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2012.09) 平成21年度:23～24.

卒後2年目における看護診断に基づいた実践の傾向

大橋舞子、植山さゆり、原口眞紀子、伊藤廣美

卒後２年目における看護診断に基づいた実践の傾向

〇大橋　舞子[1)]、植山さゆり[1)]、原口眞紀子[1)]、伊藤　廣美[1)]
[1)]看護部教育担当

Ⅰ．問題の背景と目的

Ａ大学病院では、卒後１年目は看護診断の基礎知識を重視し、診断プロセスまでのアセスメントを中心とした研修に力を入れている。卒後２年目は、対象の理解を中心としたフィジカルアセスメントと看護過程、受け持ち患者の事例検討を集合研修としている。卒後２年目後期からは、在院日数 16 日程度の受け持ち患者の看護過程を展開している。そこで今回、研修で提出された受け持ち患者の看護過程記録から、卒後２年目の看護師の看護実践の傾向を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．対象：A 大学病院に在職している卒後２年目の看護師 46 名の実践事例

２．データ収集方法：研修時に提出した実践事例の看護計画と実施評価記録から以下のデータを収集する。

１）実践事例の入院目的

２）看護計画で立案された看護診断ラベルの使用頻度

３）看護計画の評価内容と評価日数

４）看護成果尺度を用いた「看護計画立案時の状態（以下現在値）」「到達目標の値（以下目標値）「成果の達成度（以下評価値）」の記載状況

３．データの分析

１）実践事例の入院目的と立案された看護診断ラベルの使用頻度、看護計画の評価内容、評価日数、「現在値」「目標値」「評価値」の記載状況は単純集計する。

２）「現在値」「目標値」「評価値」の記載状況から、「評価値」が「目標値」に到達した看護計画を「成果達成」、到達していない看護計画を「未達成」と分類する。

①「成果達成」：「現在値」「目標値」「評価値」全てが記載されており、「評価値」が「目標値」到達している

②「未達成」：「現在値」「目標値」「評価値」が全て記載されているが「評価値」が「目標値」に到達していない。「現在値」「目標値」「評価値」のいずれかが記載されていない。

３）看護診断の使用頻度統計と入院目的、看護計画の評価内容、「成果達成」状況から看護実践の内容を分析する。

４．倫理的配慮

研修者に実践事例の看護計画と実施評価記録を、研究及び教育に役立てるため使用することを書面で説明し同意を得た。また、個人情報に係わるものは全て消去し、データは使用後に破棄した。

Ⅲ．結果

１．実践事例の入院目的と看護計画の評価内容（表１）

解決継続中止変更
未評価
手術 43249227
検査 1797200
化学療法 1724004
放射線療法 972200
その他 20711020
入院目的
単位：％

表１　実践事例の入院目的と看護計画の評価 n=46

２．評価日数

表２　評価日数　n=46

評価日数 %
１週間以内 39 8 ～２週間 4615 日～ 20 日 720 日以上 7

３．「現在値」「目標値」「評価値」「看護計画の評価」の記載状況

全て記載されていたものは 37％であった。記載が不足していた記録では、「現在値」の記載がないものが 43％と最も多く、その他が 22％であった。全て記載されていなかったものは１例であった。

４．看護診断ラベルの使用頻度と入院目的、看護計画の「成果達成」状況（表３）

Ⅳ．考察

卒後２年目の看護師の実践事例は手術による入院目的が最も多く（表１）、手術目的で入院する患者へ看護実践が多かった。また、看護計画の評価においても「解決」が多かった。しかし、評価日数は（表２）２週間以内に85％が評価されており、入院時に立案された計画が退院近くに評価されていることがうかがえる。このことから、日々のケアを評価し、タイムリーに看護計画を修正されていない傾向がある。

「知識獲得促進準備状態」「非効果的治療計画管理」の使用頻度が高く（表３）、指導の必要性、自己管理に向けた支援を意図した計画立案が多い傾向にあった。「知識獲得促進準備状態」は、手術、化学療法の患者に立案されており、５例中６例が「成果達成」に至っている。このことから、卒後２年目の看護師は、知識獲得にむけての看護実践を行っていると言える。しかし、「非効果的治療計画管理」は、「成果達成」に至った事例は６例中１例のみであった。

表３ 成果看護診断ラベルの使用頻度と入院目的、看護計画の「成果達成」状況

看護診断ラベル使用頻度
入院目的（数）
成果達成
未達成
知識獲得促進準備状態
7（15％）
手術（２）検査（１）化学療法（２）
放射線療法（１）その他（１）
5
2
非効果的治療計画管理
6（13％）
手術（１）検査（１）化学療法（１）
その他（３）
1
5
転倒リスク状態
5（11％）
手術（３）放射線療法（２）
3
2
皮膚統合性障害リスク状態
4（9％）
手術（３）化学療法（１）
1
3
感染リスク状態
4（9％）
手術（３）化学療法（１）
2
2
急性疼痛
4（9％）
手術（２）検査（１）放射線療法（１）
3
1

手術、検査、化学療法の患者に立案されていることから、指導の必要性、自己管理に向けた支援の他に、優先すべき看護問題があるため、「目標値」に到達できないことが推測される。「転倒リスク状態」は、手術、放射線療法目的の入院患者に立案されており、５例中３例が「成果達成」に至っている。「急性疼痛」は４事例中３例が「成果達成」に至っており、疼痛緩和に向けて看護実践がなされている。

看護計画の「成果達成」状況は、「成果達成」と「未達成」が半々であった。「未達成」においては、看護計画立案時、対象の個別性をアセスメントが不足し、「目標値」の設定が不適切となっていることが考えられる。

Ⅴ．結論

１．卒後２年目の看護師は手術目的で入院した患者への看護実践を最も多く行っている。また、知識の獲得に向けての看護実践を主に行っている
２．看護計画は退院時に評価している。

【参考文献】

１．黒田裕子：定着させようNANDA看護診断NANDA-NIC-NOCの実用可能性を探る、看護診断、11（１）、54 － 55